

新潟県納税貯蓄組合総連合会優秀賞

誰かの支えが未来をつくる

新潟大学附属長岡中学校

三年 大平 莉花

私の姉は、潰瘍性大腸炎という指定難病をもっている。発症は中学三年生の二月、受験直前のことだった。血便や体重減少が続き、食欲もなくなっていた。志望校には合格したが、検査の日、姉は怖がって家から出ようとせず母が無理やり病院へ連れて行った。

最初は「受験のストレスでお腹の調子が悪いだけだろう」と思っていたが、違った。専門医に回され、一か月後に診断が告げられた。それからは飲み薬に加え、水薬や坐薬の治療が始まった。水薬の注入には一時間近くかかり、苦しさのあまり泣き叫ぶ姿や夜中にお腹を押さえてトイレへ駆け込む姿を今も忘れられない。家の空気はいつも張りつめ、笑い声が消えてしまった。

いつも明るく、食えることが大好きだった姉が「お腹が痛くなるから食べたくない」と反抗するようになり、お粥ばかりの寂しい日々が続いた。家族は姉に合わせて食事を変え、毎日気を使いがら過ごした。焼き肉が大好きだった私はずっと我慢していたが、姉が勉強合宿で留守のとき、家族で焼き肉を食べた。けれど「お姉ちゃんはどう食べられないのかな。」と思うと胸が痛んだ。

診断から一年後、「特定疾患受給者証」が届いた。それを使い

ば医療費に上限があると知り、母は深く安堵していた。そしてその時母から「この制度は税金で支えられているんだよ」と教えられた。私は初めて、税金が生活を支えてくれることを知った。自分の医療費も、公費負担で五百三十円で受診できていることを思い出した。私の暮らしも見えない誰かの優しさに守られている、そう感じた。

それまで私は、税金は払うだけで「みんなの生活を苦しめるもの」だと思っていた。しかし、姉の病気をきっかけに考えが変わった。母に制度の仕組みを聞き、改めて調べてみると、二〇五〇年には一人の高齢者を約一・三人で支えていかなければならない社会が来ることを知った。少子高齢化で支える側の負担は増える。けれど、このことを知って、ただ不安に思うのではなく、自分がしっかり納税をして、支援が必要な人の生活や医療に役立つと思うようになった。

あの頃の姉は、高校の学食や大学の寮でも配慮を受け、多くの人に支えられながら日常生活を送っていた。体調を気にしながらの食事、遊びなどが制限されながらも治療を続け、少しずつ体調と笑顔を取り戻した。今は症状も落ち着き、友達と笑い合いがら大学生活を楽しみ、就職活動にも励んでいる。高額な薬もこの制度のおかげで安心して使えている。

私たちの生活は、見えないところで誰かに支えられている。あの時の姉の涙も、痛みも、きつと誰かの優しさに守られていたのだと思う。だから今度は、見えないところで誰かをそっと支える存在になりたい。